

『論語』 子路一八を用いた授業提案

——合理的なものは常に正しいのか——

荒井洋樹

一、緒言

平成三〇年版学習指導要領⁽¹⁾によって、高等学校国語科は大幅な改変がなされた。その最たるものが科目の再編で、必修の「国語総合」は「現代の国語」と「言語文化」に、選択の「現代文A」「現代文B」「古文A」「古文B」「国語表現」は「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」となった。指導内容の分割により、文学作品や古典作品を扱う時間が制限されることが予想され、多くの批判、反論があった。⁽²⁾

指導内容の分割と同時に問題となるのは、指導目標の分割である。従来の指導要領では各科目ごとに重点は異なるものの、すべての科目において三領域一事項の指導目標があった。それに対して、

1

平成三〇年版指導要領では、三領域はそのままに、次の二つの事項

を増補し、三事項を指導目標とした。すなわち、三領域（思考力・判断力・表現力等）である、

A 話すこと・聞くこと

B 書くこと

C 読むこと

と、三事項（知識及び技能）である、

1 言葉の特徴や使い方に関する事項

2 情報の扱い方に関する事項

3 我が国の言語文化に関する事項

である。それに伴い、各科目の指導目標の明確化の名の下に割り振ったのだが、これによって科目間での目標の過疎が問題となる。単純化した図だがこれを整理すると、次のようになる。

						A
						B
						C
						1
						2
						3

一見して明らかのように、目標設定のある科目とない科目が存在することになった。情報の扱い方に関する事項は、多様な情報源から正確な情報を選び出し、利用できるように指導することを目標とするものとおほしいが、この指導目標は現状、「現代の国語」と「論理国語」にだけ設定されている。反対に、目標設定のない科目については、実質的にその指導目標に関する指導は行わないことになる。こうした実態は教材の特性を無視して作り出されたものであり、指導目標達成のための効果的な授業構築や創造的な授業提案とは必ずしも親和性が高いわけではない。情報の扱い方に関する事項に限ったことではないが、教材を精査し、しっかりとした授業計画を立てることができれば、どの科目でもすべての指導目標を設定可能である。以前、筆者は古文教材を用いて情報の扱い方に関する事項を指導できるのではないかという問題意識の下、授業提案を行う^③。本稿はそれに連なるものとして、漢文教材の『論語』を用いて情報の扱い方についての授業提案を行う。具体的には高等学校の

「言語文化」を想定し、『論語』子路一八とそれに関連する諸資料を取り上げる。

『論語』の解釈と教育に関わる先行研究の中で、注釈に関わるものはいくつか見られるが、基本的には古注をそのまま読むことを想定している節があり、想定校種も中学校とするものばかりで、現実的な授業実践へは径庭がある。

高等学校での取り組みとしては、東京書籍の『精選言語文化』^⑤において「『論語』の注釈を読む」という単元を設けて、「論語」の原文のほか、朱熹の『論語集注』と伊藤仁斎の『論語古義』を読み比べる活動を設定している。^⑥本稿の発案とも近いが、部分の解釈に対して、漢文で書かれた注釈本文を読み比べる活動を設定しており、やや難度が高いように思われる。

本稿では高等学校での実践を想定し、右の指導目標を組み込むことで、『論語』の教材的な価値の見直しをも視野に入れている。

二、教材の分析

今回取り上げる『論語』子路一八は、高校教材でも取り上げられることのある章段である。まず、本文を示す。本稿では漢文の引用に際して、組み版の都合により、先に白文を示し、次に書き下し文を示すことで筆者の訓みを提示する。^⑦

葉公語孔子曰「吾党有直躬者。其父攘羊、而子証之。」孔子曰

「吾党之直者異於是、父為子隱子為父隱。直在其中矣。」

葉公、孔子に語りて曰はく「吾党に躬を直くする者有り。其の父羊を攘みて、子之を証す」と。孔子曰はく「吾が党の直き者は是に異なり、父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと其の中に在り」と。

この章段では、葉公が父の罪を告白した子を正直者と賞讃したのに対し、孔子は父子で罪を隠し合うことの中に、素直さがあると応じている。孔子の言は言葉少なで、ただちには理解しがたい面が存することも確かである。それゆえ、『論語』の注釈史の中でも、解釈に揺れが生じている。また、この逸話を掲載する他作品においても、改変が加えられており、それもまた一つの解釈ということになる。本提案においては、『論語』諸注の理解を参照するとともに、この逸話を再録する『呂氏春秋』を参照し、これらを比較することを通して、情報の扱い方に関する事項を指導したいと考えている。なお、『論語』に関しては、津田左右吉が指摘したようにあくまで後代の編纂物であり、近年渡邊義浩が詳細に検討したように現存伝本自体がそれなりに加工されたものではあるが、今回はそこには踏み込まない。あくまで現存本に近い『論語』の成立以降における解釈を問題とする。すなわち、『論語』の注釈史と逸話の受容・変質を教材化できるのではないか、という提案である。

さて、『論語』子路一八の解釈史を確認すると、比較的早い段階での『論語』の理解を示す何晏の『論語集解』に基づく渡邊義浩の

現代語訳は次のようになっていた。⁽¹⁰⁾

葉公が孔子に語って言った、「わたしの郷党に身を正して行動する者がいる。その父は（故あって）羊を盗んだが、子はこれを証言した」と。孔子が言った、「わたしの郷党の正直な者はそれとは異なります。父は子のために（かばい立てして）隠し、子は父のために隠します。正直さはその中にあります」と。

ほぼ原文に忠実な解釈であるといえるが、そのことば足らずな部分もそのまま引き継いでおり、ただちには理解しがたい。

他方、朱熹の解釈を踏襲する宇野哲人の『論語新釈』⁽¹¹⁾では、葉公が孔子に告げて言うには、「私の党類の中に身の行いを直くして少しも曲がった行いをしない者があります。父が羊を攘んだのを子でありながら訴えてこれを証明しました。子として最も親愛する父の悪事をすら隠さないので、ですから随分ではありませんか。」孔子「私の党類の身の行いを直くする者はこれとちがいます。子に過ちのある時は、父は子のためにこれを隠して人には知らせません。父に過ちのある時には子は父のためにこれを隠して人には知らせません。父子互いに隠すのは直くないようですが、これは人情の至極であって、故意に直いことを求めないけれども、その自然の人情に従って互いに隠し合うところに直い所があるので。」

と解釈される。朱熹の理解を反映して大きく補った解釈を提示して

いる。本章段の論理構成は見通しを付けやすくなってはいるが、原文とはだいぶ乖離しており、訳文の独立性が高いといえよう。同様の現象は『論語』のほかの章段でも看取でき、いわゆる意識を行う場合の解釈は、おおむね朱熹の『論語集注』の理解に基づいている。この部分、『論語集注』には、

父子相隠、天理人情之至也。故不求為直、而直在其中。

父子相ひ隠すは、天理人情の至りなり。故に直を為すを求めずして、直其の中に在り。

とあって、父子が互いに隠すことは天理であり人情の至極で、それゆえことさらに正直な行いをなさずとも、その互いに隠し合うという行いの中にこそ正直さが立ち現れる、と解釈している。朱熹の解釈は『論語』を一貫した思想で理解するものである。換言すれば、合理的に理解した結果ということが出来る。

『呂氏春秋』当務では次のようになってはいる。⁽¹³⁾

楚有直躬者。其父窃羊而謁之上。上執而将誅之。直躬者請代之。将誅矣。告吏曰「父窃羊而謁之、不亦信乎。父誅而代之、不亦孝乎。信且孝而誅之、国将有不誅者乎。」荆王聞之、乃不誅也。孔子聞之曰「異哉、直躬之為信也。一父而載取名焉。」故直躬之信、不若無信。

楚に直躬なる者有り。其の父羊を窃みて之を上に謁ぐ。上執りて將に之を誅さんとす。直躬なる者之に代はらんことを請ふ。將に誅せんとするに、吏に告げて曰く、「父羊を窃みて

之を謁ふ、亦信ならずや。父誅せられて之に代はる、亦孝ならずや。信且つ孝にして之を誅せば、国將た誅せられざる者有らんや。」と。荆王之を聞きて、乃ち誅せざるなり。孔子之を聞きて曰く「異なるかな、直躬の信たるや。一父にして載び名を取る。」と。故に直躬の信、信無きに若かず。

ここでは、『論語』のような理解しづらい点はなく、直躬が一事にして信と孝の二つの名をあげたことを批判しており、信がないのに及ばないとまで言及している。

信は前漢の董仲舒が四徳に信を加えて五常としたことにより重視されるようになった概念で、『呂氏春秋』の記述はその合理化にあたって後代の価値観が反映されていると理解できる。

以上、教材の分析を行った。『論語』の解釈では、現代語訳を確認し、現行の注釈書の間でも理解にかなりの幅が出ることを確認した。また、その根源には朱熹の『論語集注』などの古注があることにも触れた。次いで『呂氏春秋』の特徴を確認した。『論語』とは異なり、論理的に整備されており、一つのエピソードとして合理化されていることを指摘した。

三、教材の特性

前節での分析を踏まえ、本節では教材の特性と学習指導要領記載の指導目標について確認する。

『論語』子路一八は、検定教科書の中でも、高等学校用教科書の採択率が高く、平成三〇年版指導要領準拠の検定教科書では高校生用の「言語文化」での採択が多い¹⁵⁾。従って、ここでも高校生用の「言語文化」を想定科目として指導計画を立てるものとする。漢文を指導内容とすることから、三学期ないし一月から二月ころの学習状況を前提とする。古典文法は用言と類出する一部助動詞を習得済みとし、漢文は一通りの書き下しが可能な学習状況を想定する。文法事項としては、『論語』子路一八には難度の高い事項は存在せず、『呂氏春秋』当務には再読文字（「将」）があるほか、いくつかの句形が見いだされる。ただし、「不若」など基本的な句形に限られるほか、「不亦く乎」のように繰り返し同じ句形が使用されるなど、平易なものと判断できる。高校一年次の漢文学習の再確認として適当だといえよう。

次に指導目標の確認を行う。まず、「言語文化」で漢文教材を取り上げる際の通常の指導目標だが、

1 言葉の特徴や使い方に関する事項

ア、言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解すること。

エ、文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解すること。

3 我が国の言語文化に関する事項

ア、我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

イ、古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

ウ、古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。

C 読むこと

イ、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。

エ、作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の理解を深めること。

があげられる。あくまで一般的事項であり多言を要すまい。

今回の提案の主眼となる情報の扱い方に関する事項に目を向ける。同事項は「言語文化」においては指導目標が設定されていないため、同じく必修科目である「現代の国語」の指導目標を参看することとする。そのうち、本提案において関係するのは、

2 情報の扱い方に関する事項

エ、情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深め使うこと。

である。そもそも同事項の設定は、「様々な媒体の中から必要な情

報を取り出したり、情報同士の関係を分かりやすく整理」することを目的としているのだが、実際に設定されている項目としては、

ア、主張と論拠など情報と情報との関係について理解すること。

イ、個別の情報と一般化された情報との関係について理解すること。

オ、引用の仕方や出典の示し方、それらの必要性について理解を深め使うこと。

といった内容が並び、いわゆるアカデミック・ライティングの指導を高等学校まで下ろしている趣がある⁽¹⁶⁾。むしろ、アカデミック・ライティングの基盤となるのは、元となる情報の吟味であり、それゆえに先掲エのような目標が設定されるのである。

なお、情報の信頼性については、中学校第三学年の指導目標に、
イ、情報の信頼性の確かめ方を理解し使うこと。

⁽¹⁷⁾とあり、中学校である程度の指導が想定されており、それを受け、高校一年次に吟味の仕方を指導することになっている。ちなみに、高校二年次三年次の論理国語では、情報の妥当性や信頼性に関わる指導目標は設定されていない。指導要領上では、高校の必修科目の習得で情報の吟味の仕方は学び終えることになっている。

さて、本稿での授業提案は、「情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方」に対する理解を深めることを目標とするが、前節で述べたように本教材は合理的な解釈の提示や逸話自体の合理化が図られている

ものである。つまり、生徒たちに合理的なものが常に正しいとは限らないと理解させることが目的となる。現代社会に生きる生徒たちは、指導要領にも記されるとおり、さまざまな媒体に接している。近年もフェイクニュースが問題となるなど、情報の質を見極める目を身につけることが肝要である。その際、合理的な情報には疑いを抱きづらいついてはならないかと考えられる。しかしながら、情報の中には後発的に合理化されたものも存在する。この授業を通して、合理的なものが常に正しいわけではないことを学習することで、現代社会を生きる力を身につけてほしいと考えている。先述のとおり、情報の吟味の仕方については、これが最後の学習機会になることも想定され、適切な指導目標となろう。

こうした見地に立つと、本教材は①『論語』の原典に近い解釈を示す渡邊の理解と、②『論語』を合理的に解釈した朱熹の理解に基づく宇野の理解と、③『論語』の逸話自体を合理的に改編した『呂氏春秋』という三つの要素に分けて理解できる。

漢文で記された古注を比較検討するという東京書籍『精選言語文化』の言語活動に比して、本提案では①と②のように注釈作業の成果としての現代語訳を用いて比較を行うものである。考察の出発点たる原文(①)と、解釈の結果である現代語訳(②)の比較をしており、解釈の過程である注釈は触れていない。しかし、なぜ、現代語訳に差が出るのかを検討しようとするれば、自ずと注釈の存在に行き着く。そうなれば、『論語集解』や『論語集注』をはじめとした

注釈への展開も可能となる。その際、東京書籍『精選言語文化』が提示したように、漢文注を用いた活動にも変更可能であり、対象となる生徒の学習状況に応じて難易度を設定できるところに利点がある。さらに子路一八に限れば、③のように他作品へも展開することができる。加えて、広く儒学の展開を把握する上でも重要な視角を提供することで、学習指導要領のC読むことエの「他の作品」への対応も可能となる。

四、授業提案

本節では具体的な授業提案を行う。次に示す全二時間配当を想定している。¹⁸⁾

第一時 『論語』 子路一八の読解・現代語訳の比較

第二時 『論語』 子路一八と『呂氏春秋』の比較

第一時では、『論語』子路一八の読解と現代語訳の比較を行う。漢文教材であるので、はじめに書き下しをする。前節でも述べたとおり、本段には難解な句形は存在せず、高校一年次の生徒であったも、自力で書き下しを行うことができる。授業内では、置き字（「而」「於」「矣」）など書き下しを行う上での注意事項を確認する。ついで、先掲の渡邊訳と宇野訳を印刷して配布し、その違いについて自分の意見を考えるように指示する。その際、次の論点を提示する。

一、二つの現代語訳を読み比べ、どのような違いがあるか考えてみよう。

二、二つの現代語訳のうち、どちらにより納得できたか考えてみよう。

一は二つの現代語訳の違いを生徒たちに自覚させる問いである。時間を取ったのち、クラス内で相違箇所の共有を行い、二へとつなげる階梯とする。両者を比較すると、宇野訳には原文にない叙述が多く含まれている。まずはこの点をしっかりと理解させ、二へと展開する。

二は一での活動を踏まえ、両者のどちらにより納得するのかを考えさせる。その後、四〜五人のグループに分かれ、それぞれの意見を話し合う時間を設ける。

どちらの訳に納得するののかとの問いは、学習者がどのような観点で評価を行うのかによって、答えが変わる。すなわち、原文との比較において逐語訳をできていることに価値を見いだすのであれば渡邊訳に寄り、章段としての解釈のしやすさに価値を見いだすのであれば宇野訳に寄ることになる。従って、グループ活動においては、なぜその訳を支持するのか、その理由を意識するように声かけを行う。

最後にクラス全体で各グループの意見を共有して第一時を終了する。右の活動を通して、第一時では、①現代語訳にはさまざまな方法があること、②現代語訳の正しき、納得のしやすきは現代語訳に何を求めるのかによって変わることと理解することを目標とした

い。

第二時は第一時のを踏まえ、『呂氏春秋』との比較を行う。まずは『呂氏春秋』の書き下しと現代語訳を施す。こちらは再読文字「將」やいくつかの句形が見られるので、確認に時間がかかるものと予想される。現代語訳まで確認をした後、第一時と同じグループで『論語』との比較を行う。前半はほぼ同一の内容となるが、孔子の返答が異なっており、孔子は自党のものを引き合いに出して反論するのではなく、直躬の信を直接批判する言説となっている。その論理展開も、直躬が一事にして信と孝の二つの利を得ていることを問題視している。第一時に『論語』の現代語訳の比較を行っており、その内容についてはある程度理解していることが予想され、両者の違いを見いだすことは容易であろう。第二時では、同一の逸話であっても、作品によって違いが生じることを理解させたい。また、グループで話し合うテーマとして、『論語』と『呂氏春秋』のいずれが孔子の考えを伝えているか、を提示する。素朴な形で提示される『論語』か、論理が明快な『呂氏春秋』かは、明確に答えの出る問題ではなく、生徒たちの間でも考え方の差が出るだろう。グループワークを通し、『論語』と『呂氏春秋』に対する互いの考え方を伝え合い、その主張に向き合うことで、情報の妥当性や信頼性を吟味し、他者と議論できる水準までそれを高めることができれば、本授業で提案する目標は達成となる。その際、論拠が作品を読んだ印象にならないよう、各グループを回り、議論の趨勢を注視し

なければならぬ。

以上の活動により、生徒たちはグループワークという実体験を通して、情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方を体得できるはずである。

五、結 語

『論語』子路一八の現代語訳ならびに『呂氏春秋』当務の記事を比較することを通して、同一の逸話でありながら、収録作品やその解釈によって理解に差が出ることを起点に授業提案を行った。根本にあるのは、作品を合理的に理解しようとする営為であり、現前する情報は常に合理化の意識の下に編集されている。裏返せば、我々がさまざまな情報を扱うには、合理化によって改変されているリスクを認識しながら、妥当性を検討する必要があるということである。本稿で提案した教材は、それ自体が合理化する動態を含み込んだものであり、これを用いてグループワークを行うことで、生徒たちも情報を扱う際の注意点を体得できる。また、古典教材や漢文教材に立ち戻れば、各作品の解釈行為それ自体も対象化して理解できる。主体的に作品を解釈し、探究してゆく姿勢を身につける上で重要な階梯となる。

翻って、こうした情報の扱い方に関する事項は、「言語文化」や「古典探究」では指導目標に設定されていない。また、本稿では焦

点を当てなかったが、グループワーク活動に指導目標を設定するであれば、話すこと・聞くことについても、当然射程圏内に入ってくる。古典教材や漢文教材は教材の使い方や指導の仕方次第で、高い汎用性を持っている。こうした教材利用の可能性を損なう、平成三〇年版学習指導要領における指導目標の分割は問題がある。国語教育に何を求めるのかは改めて考える必要があり、それを整理した上で、古典教材漢文教材の価値を検討し、授業提案を行ってゆきたい。

注

- (1) 文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』（東洋館出版社 平成三一年）。
- (2) 紅野謙介『国語教育の危機』（ちくま新書 平成三〇年）など。そのほか、文学系学会一六団体による「高等学校国語・新学習指導要領」に関する見解」と題する共同声明もあった。
- (3) 拙稿「古典文学教材で何が可能か」（『大阪大谷大学紀要』五六 令和四年二月）。
- (4) 井上泰「中学校国語における「注釈」を用いた漢文学習の試み」（『中等教育研究紀要』五七 平成二九年三月）、大橋敦夫「『論語』の授業のひと工夫」（『上田女子短期大学紀要』四五 令和四年一月）、伊崎孝幸「国語教育における『論語』の教材価値について」（『教育実践学研究』二七 令和四年三月）など。
- (5) 『精選言語文化』（東京書籍 言文七〇二）。
- (6) 同社の『新編言語文化』（東京書籍 言文七〇一）にも同題の単元が設定されているが、かなり簡素化されており、本稿では『精選言語文化』を参照することとした。
- (7) 『論語』は岩波文庫に拠り、適宜通行の字体に改め、句読点等を整

えた。

- (8) 津田左右吉『津田左右吉全集』第一四巻『論語と孔子の思想』（岩波書店 昭和三九年）。
 - (9) 渡邊義浩『論語』の形成と古注の展開（汲古書院 令和三年）および『論語』（講談社 令和三年）。
 - (10) 渡邊義浩『論語集解下』（早稲田文庫 令和三年）。
 - (11) 宇野哲人『論語新釈』（講談社学術文庫 昭和五五年）。
 - (12) 『論語集注』は土田健次郎『論語集注3』（東洋文庫 平成二六年）に拠る。
 - (13) 『呂氏春秋』は楠山春樹 新編漢文選『呂氏春秋』（明治書院 平成八年）に拠る。
 - (14) 土田健次郎『儒教入門』（東京大学出版会 平成二三年）。
 - (15) 現行の検定教科書では、『言語文化』（数研出版 言文七〇七）、『精選言語文化』（明治書院 言文七一一）などが採録する。
 - (16) この点、指導要領の総説において、
論理的文章を書く資質・能力の育成については、近年、大学の初年次教育において、論文やレポートなどの書き方に関する講義が必要となつていくことを踏まえ、「現代の国語」や「論理国語」を中心に充実を図っている。
との記述があり、意図的なものと判断できる。
 - (17) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説』（東洋館出版社 平成三〇年）。
 - (18) 通常、『論語』は複数の章段を取り上げるため四から五時間程度の配当と思われるが、ここでは『論語』子路一八に焦点を当てたため、この部分の授業計画だけを示すこととした。
- 〔付記〕脱稿後、土田健次郎『論語』（ちくま学芸文庫 令和五年）が刊行されたが、本稿ではその成果を反映できなかった。諒とされた。